

神奈川における縄文時代文化の変遷VII

—後期初頭期 称名寺式土器文化期の様相 その4 文化的様相(2)—

縄文時代研究プロジェクトチーム

I. はじめに

今回の検討は、平成17年度から開始した後期初頭期・称名寺式土器文化期の様相をめぐる研究の4年次目にあたる。これまでに「主要遺跡の集成・一括出土事例」の検討を行い、「称名寺式土器編年試案」を提示し、竪穴住居址・柄鏡形（敷石）住居址の分析、住居址以外の遺構・貝塚、土製品、骨角製品といった土器以外の遺物等、称名寺式土器文化期の個別遺構・遺物についての分析・検討を行ってきた。平成20年度は、これまでの研究に引き続き、集落の様相・分布、昨年度検討を見送った「屋外埋設土器」、「石器」・「石製品」に関する検討を行った。その結果、どのような傾向が把握できるのか、以下各項目にしたがってその内容について提示していきたい。

(岡 稔)

II. 集落

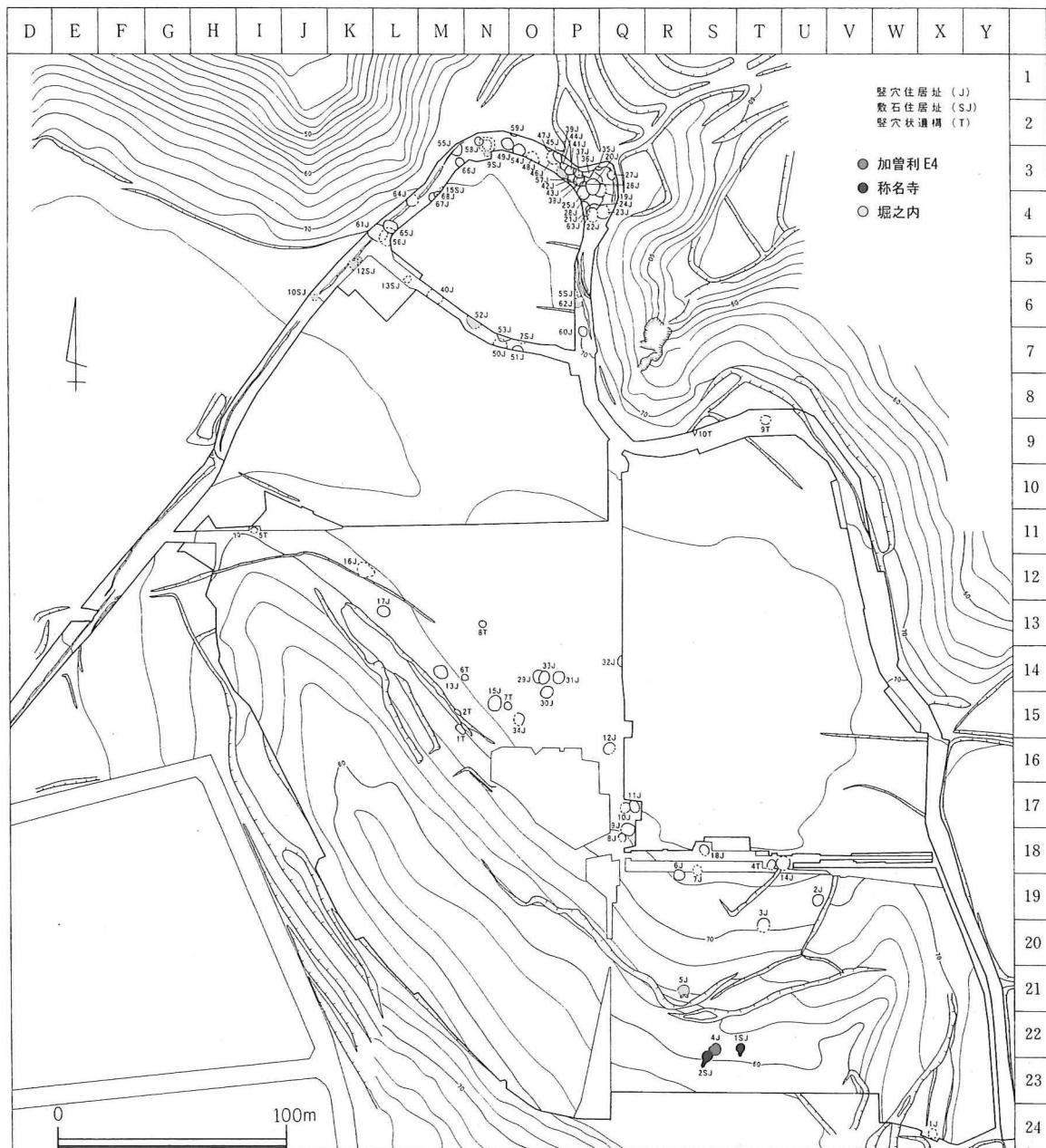
後期初頭の遺構が確認されている遺跡の中で、住居址が存在するのは23遺跡ほどである。該期の集落は大きく、中期後葉から連続する集落、後期初頭単独集落、後期前葉へ連続する集落に分けることができる。それぞれの代表的な遺跡を概観し、該期集落の特徴についてみてみたい。

中期後葉から連続する集落

山北町尾崎遺跡、相模原市当麻遺跡・田名花ヶ谷戸遺跡、平塚市原口遺跡、横浜市保土ヶ谷区帷子峯遺跡・青葉区松風台遺跡・青葉区稻ヶ原遺跡などがある。尾崎遺跡は集落の半分程度を調査した結果、中央に空白地をもち、弧状に並ぶ中期（勝坂式期・加曾利E・曾利式期）から後期（称名寺式期）の住居址35軒が検出された（第1図上）。全体としては中央に広場をもつ径約50mの環状集落をなす可能性がある。住居址は、その配置から、東群・西群・北群に分けることができる。曾利Ⅲ・Ⅳ式・加曾利E 3式期には東西両群に住居址が存在し、曾利Ⅴ式・加曾利E 4式期には東群・西群・北群に住居址が、西群・北群に敷石住居址（第一・三配石群）が展開していた（岡本1977）。称名寺式期には住居址数が激減し、三群構成は崩れ、東群にのみ、敷石住居址1軒を含む第二配石群が存在した。第二配石は称名寺式土器中段階が出土している。

当麻遺跡第3地点と田名花ヶ谷戸遺跡は、調査年は異なるが、同一遺跡であり、両者を合わせると中央広場に土坑墓群と弧状列石をもつ径約100mの環状集落をなす（第1図下）。157軒の縄文時代の住居址が確認されているが、大部分は中期（勝坂式期・加曾利E・曾利式期）に属する。中期末葉（加曾利E 4式期）の住居址は柄鏡形住居址と円形住居址が15軒程あるが、環状集落の南東側では環状をなす住居址群の明らかに外側に、環状集落の北や西側では環状集落を構成する住居址群のやや外寄りに分布し、加曾利E 3式期までの住居址配置とは異なることが看取された（白石1977）。さらに加曾利E 4式ないし称名寺式期は1軒、称名寺式期と考えられる住居址は2軒と激減する傾向が見られ、更にそれらの住居址の配置は中期末葉の住

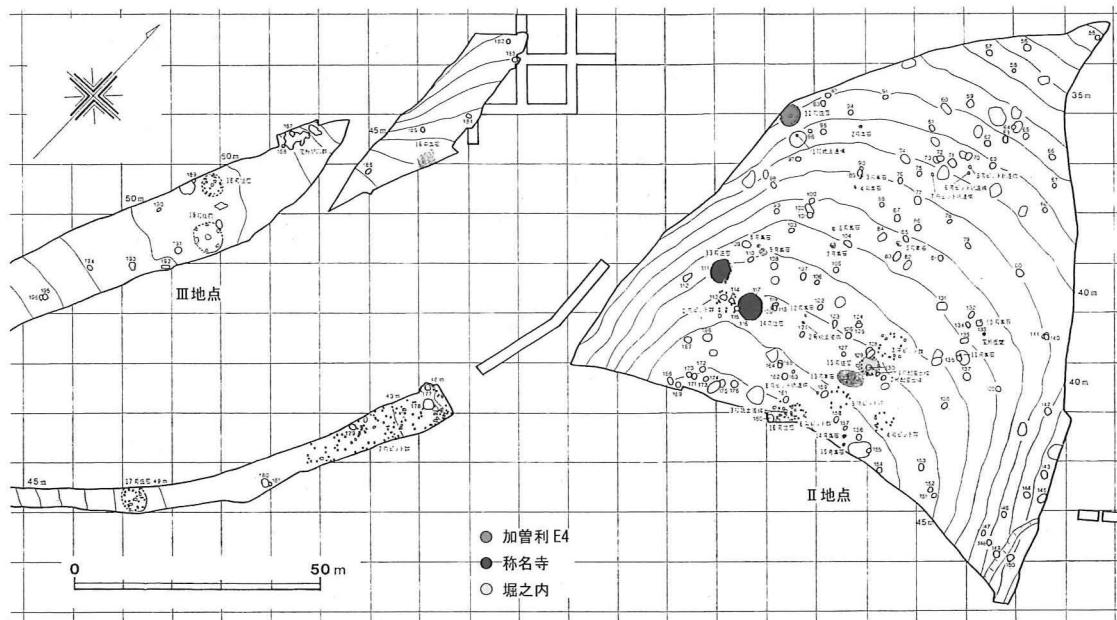




第2図 称名寺式期の集落址（2）原口遺跡

居址群の近くにあり、そのプランは全て柄鏡形敷石住居址をなしていた。称名寺式期の住居址から出土した称名寺式土器はみな中段階の所産である。

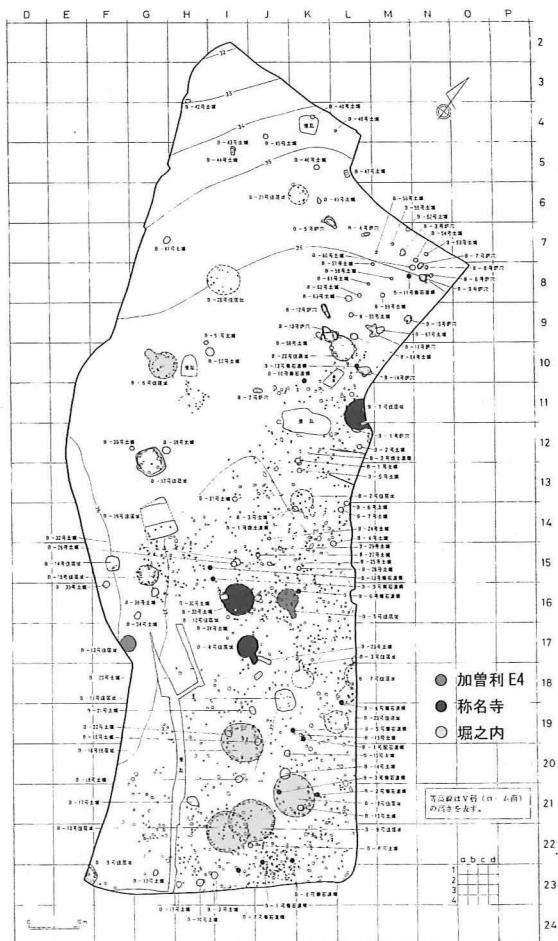
原口遺跡は前期末葉から後期前葉までの集落。中期後葉から連続すると同時に後期前葉へも連続する遺跡である。中期後葉では竪穴住居址40軒が存在し、その分布は北側の住居址群と南側の住居址群に分かれる。北側の住居址群（K～Q-2～7区）は住居址36軒からなり、台地平坦部を取り囲んで径約100mの環状集落が想定され、南側の住居址群（S～U-18～20区）は4軒の住居からなり、緩斜面から谷部に散漫に分布していた（第2図・長岡2002）。称名寺式期の遺構としては、敷石住居址が南側住居址群分布エリアに2軒存在する。それらは谷部にあり、等高線に沿って、張出部（出入口部）を斜面下方に向けて、並んで存在していた。2軒のうち西側の1軒は称名寺式中段階の所産で、中期末葉（から称名寺式古段階後半を含む）



第3図 称名寺式期の集落址（3）帷子峯遺跡

住居址を切って存在し、東側の1軒は称名寺式中・新段階の所産である。各時期1～2軒の住居址の存在が想定され、中期の環状集落のある場所は埋設土器が2基あるのみで、中期とは異なる場所に集落が存在している。また後期前葉の敷石住居址は中期の環状集落のある場所に再度分布している。

帷子峯遺跡は緩斜面に位置する遺跡で、中期後葉から後期前葉までの遺構が検出されている（近藤他1984）。中期後葉の住居址は第Ⅲ地点に2軒あり、中期末葉は第Ⅱ地点に1軒ある。該期の住居址は第Ⅱ地点に2軒ほどある（第3図）。共に称名寺式中段階に属する。1時期2軒存在したと言えるかもしれない。後期前葉になると第Ⅱ地点には住居址1軒あるが、主体は東側の第Ⅰ地点に移る。第Ⅰ地点は調査区が狭いため後期前葉の遺構配置を語ることはできないが、中期後葉から後期初頭にかけては住居址が環状配置をとることはなく、非環状集落と言える。松風台遺跡・稻ヶ原遺跡も中期の非環状集落から連続する遺跡である。松風台遺跡は丘陵尾根付近にあり、中期後葉の住居址2軒、そ



第4図 称名寺式期の集落址（4）稻ヶ原遺跡A地点

これから約40m離れて後期初頭の住居址1軒がある（渡辺務1990）。他に屋外埋甕はあるものの住居址は極めて少ない。稲ヶ原遺跡は台地の頂部付近に位置し、中期後葉から後期前葉まで連続する遺跡（平子他1992）である。中期後葉から中期末葉にかけては非環状集落で、後期初頭も住居址1～2軒の散漫な非環状配置をとる（第4図）と思われるが、東側が未調査のため全体構成は、わからない。

後期初頭単独集落

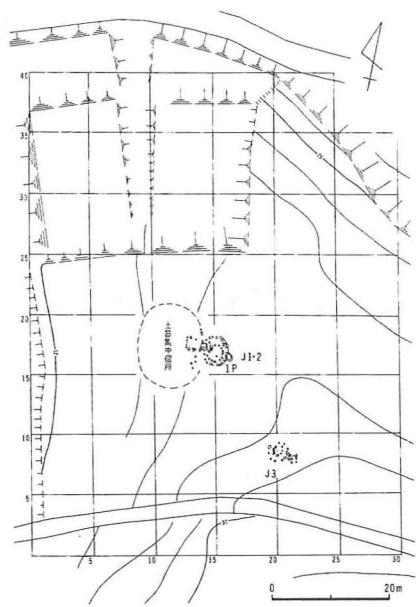
横浜市都筑区水窪遺跡、藤沢市用田鳥居前遺跡、座間市山ノ上遺跡、中井町東向遺跡、清川村久保ノ坂遺跡などがある。水窪遺跡は台地先端部に位置し、緩やかに傾斜する狭い平坦地に3軒の柄鏡形住居址が存在していた（第5図）（石井他1985）。時期は称名寺式中段階に属する。2軒は重複しており、1時期には1～2軒程存在したと思われる。用田鳥居前遺跡は敷石住居址2軒・竪穴状遺構2基が検出された（第5図）（栗原他2002）。時期別に見ると古段階後半の敷石住居址1軒・竪穴状遺構2基、古ないし中段階の住居址1軒となる。それぞれ重複関係なく単独で存在し、1時期には住居址1軒、竪穴状遺構0～2基存在したと思われる。山ノ上遺跡では敷石住居址3軒あり、称名寺式の中ないし新段階の住居址1軒、新段階の住居址2軒からなる（第6図上）（大上1989）。それぞれは重複関係なく、1時期2～3軒の程度の存在が想定される。1号敷石住居址と2号敷石住居址の間には若干の空白地があり、空白地には中央広場ないしは道が存在したと思われる。住居の出入口部は中央の空白地に向けた配置をとっていた。なお、1号敷石住居址の近傍に配石墓が存在している。時期は不詳であるが、配石墓は集落の中央には位置していないことを付記しておく。東向遺跡も緩やかに傾斜する平坦地にある（第5図）（村上他1998）。住居址1軒・敷石住居址1軒・掘立柱建物址1基などが存在する。時期をみると住居址からは称名寺式土器中・新段階・堀之内1式土器が出土しており、敷石住居址からは称名寺式土器古・中段階の土器、掘立柱建物址からは称名寺式土器中～新段階が出土している。時期は確定しにくいが、住居址→敷石住居址という順序にはなりそうで、調査区内では1時期1軒の住居址の存在が想定される。調査区が狭いので、集落全体の遺構配置は不明である。久保ノ坂遺跡は河岸段丘上の遺跡で、敷石住居址が2軒検出されている（第5図）（恩田1998）。時期は称名寺式新段階に属する。配置を見ると、両者は等高線に沿って16mほど離れて存在している。このような等高線に沿う直線的配置は、後期前葉の伊勢原市下北原遺跡南側配石や後期前中葉の秦野市曾屋吹上遺跡と共に通するもので（松田2007）、後期前中葉の遺構配置と関連をもつものと評価できるかもしれない。

後期前葉へ連続する集落

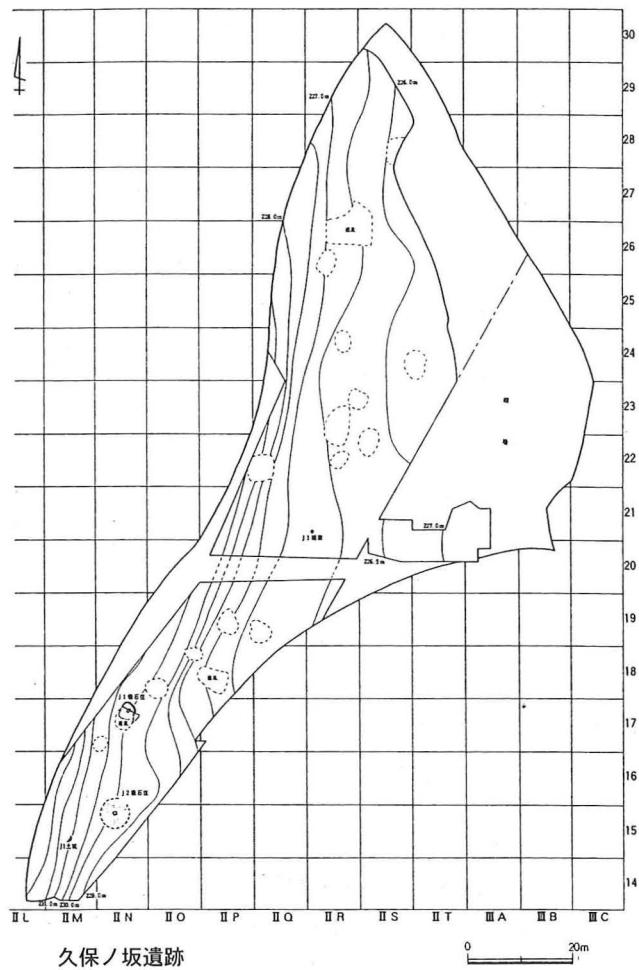
代表的な遺跡に横浜市港北区山田大塚遺跡がある（第6図）。当遺跡は台地上の平坦部から斜面にかけて遺構が存在した。後期初頭前後で言うと中期末葉から後期前葉まで集落が形成された。中期末葉は散漫な分布を示すのみである。該期になると平坦部の東側に2軒の柄鏡形住居址、南側斜面部に1軒の住居址がある。いずれもみな南北方向に出入口部を開けている。住居址の時期は称名寺式中段階のものと新段階のものがあるので、1時期1～2軒程度であったと考えられる。このほか貯蔵穴がやや多く存在している。後期前葉では平坦部・南側斜面・北側斜面の3ブロックに分かれ（石井1990）。後期初頭の南側斜面の一群は後期前葉の住居址群へ連続したと考えられるが、北側斜面と平坦地の本格的利用は後期前葉になってから開始された。

まとめ

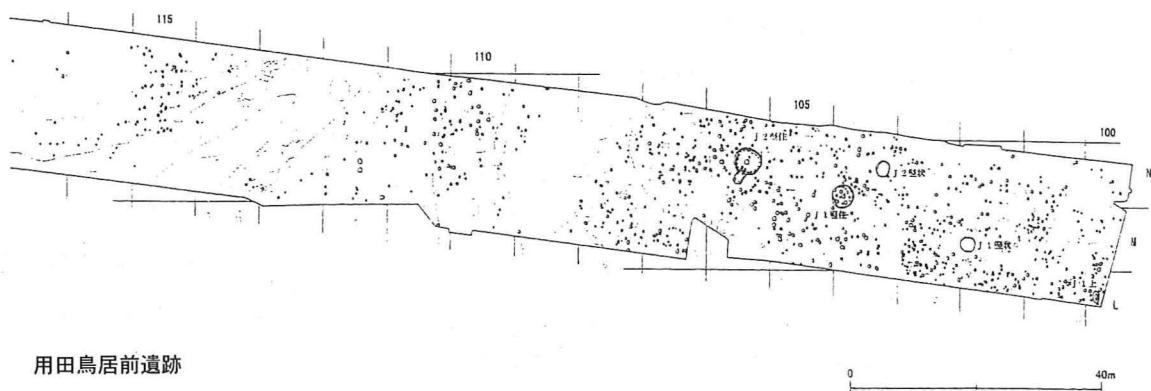
後期初頭の集落は前後の時期とつながらない該期単独集落が多い。集落内の住居軒数は少なく、散漫な分布を示し、集落内で該期の住居址が切り合い関係をもつことはほとんどない。柄鏡形住居址または敷石住居



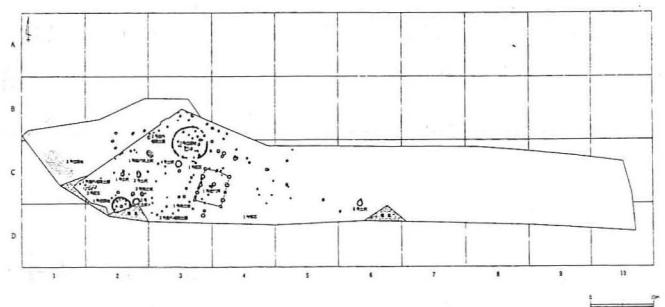
水窪遺跡



久保ノ坂遺跡

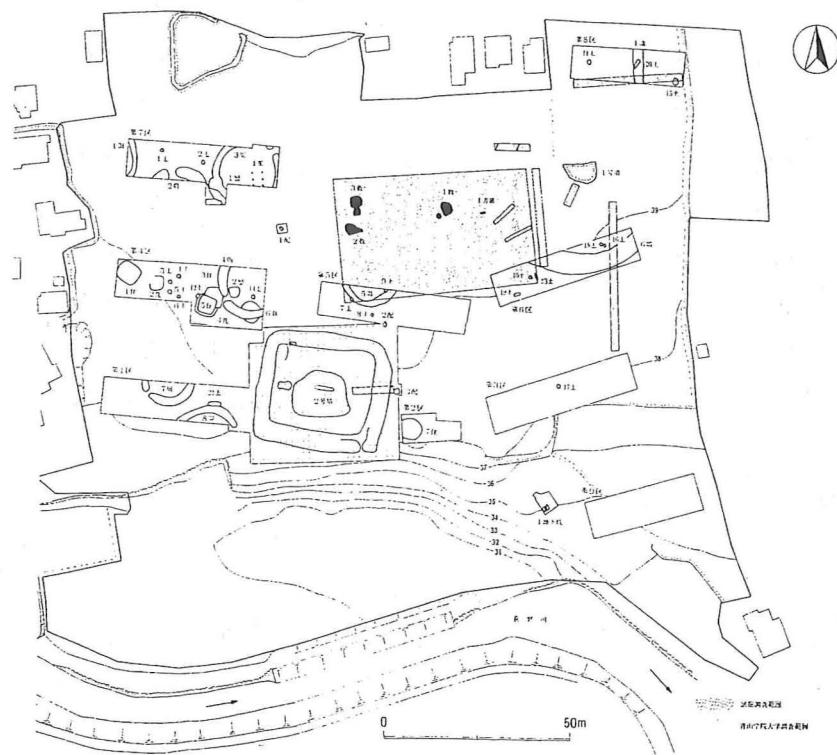


用田鳥居前遺跡

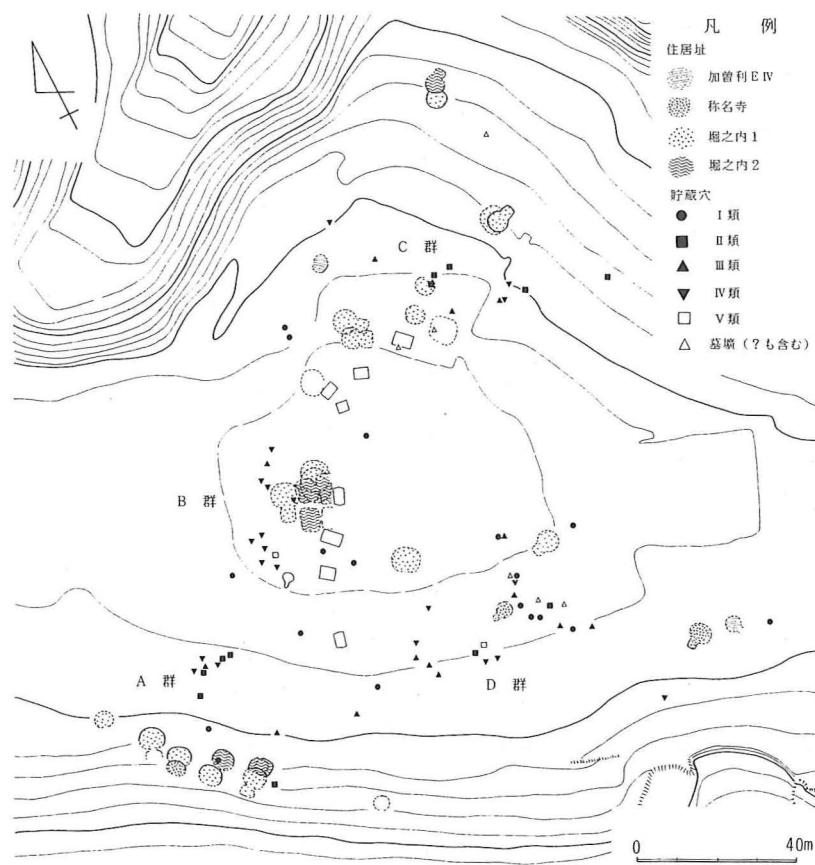


東向遺跡

第5図 称名寺式期の集落址（5）



山ノ上遺跡



山田大塚遺跡

第6図 称名寺式期の集落址（6）

址が多くを占め、同時存在住居址数は1～3軒程度で、軒数が少なかったと考えられる。中期後葉に環状集落をもつ遺跡であっても、中期後葉の環状集落構造を保持するものではなく、住居は環状集落から外れたところに作られることが多い。住居の配置も環状をなさず、少数の住居が集まって集落を構成しているといえる。こうした傾向は中期末葉から始まることが多く、当麻遺跡や相模原市新戸遺跡などでは中期末葉にそうした傾向を看取できる。中には等高線に沿って住居址が列状配置をとるもの（久保ノ坂遺跡）もあり、後期前葉以降の下北原遺跡や曾屋吹上遺跡に見られる列状配置につながるものかもしれない。中期後葉から中期末葉にかけて住居址が環状構成をとらない非環状集落では、後期初頭でも住居址が散漫で、環状構成をとらない。また、後期に連続する遺跡では、該期の遺構配置を部分的に継承する部分もあるが、後期初頭の集落規模が小さいため、多くは後期前葉に居住域が新たに作られ、集落の拡大がはかられたようである。（松田光太郎）

参考文献（報告書は『研究紀要11』の文献目録に掲載してあるので、省略）

- 石井 寛 1994 「縄文後期集落の構成に関する一試論」『縄文時代』5 縄文時代文化研究会
 松田光太郎 2007 「南関東地方の諸遺跡」『季刊考古学』101 雄山閣
 山本暉久 1980 「縄文時代中期終末期の集落」『神奈川考古』9 神奈川考古同人会

III. 遺跡分布

ここでは、神奈川県内における称名寺式期の遺跡の分布を概観する。

第7図は『研究紀要11』の「主要遺跡地名表」に掲載した216遺跡と、本稿の補遺に掲載した6遺跡、計222遺跡を40万分の1の地形区分図にプロットしたものである。

まず県東部の大きな分布の在り方をみてみると、鶴見川上～中流域（およびその支流）の下末吉台地、相模川中流域（およびその支流）の相模野台地に集中がみられる。これらについては中期後葉の遺跡の分布地域とほぼ重なるといえる。一方、中期後葉にみられなかつた、境川や引地川の下流域や田越川支流の池子川流域に遺跡の集中がみられるのがこの時期の特徴といえよう。しかし、この結果のみをみて、遺跡の分布特徴を結論付けるのは、発掘調査の行われた件数の多寡にもよるため断言するのは避けたい。また、当該時期のデータベースは土器資料（破片を含む）のみ検出され、遺構が検出されていない遺跡も数多く抽出している。土器が数点でも検出されれば、その遺跡に近接しているところに生活の跡が存在することが考えられるが、土器のみが検出されている遺跡は除外し、称名寺式期のもの、もしくは称名寺式期にかかると考えられる住居址が検出された遺跡を抽出して、それについて以下で簡単に言及してみることとする。

※括弧の数字は地図上の数字。『研究紀要11』「主要遺跡地名表」の遺跡No.と対応している。

まず、下末吉台地と多摩丘陵についてみてみる。

早渕川流域には加曽利E式期から称名寺式期の住居址群（主体は加曽利E2式）が検出された横浜市港北区畠屋の上遺跡（13）や称名寺式期の住居址が3軒検出された横浜市都筑区水窪遺跡（33）、矢上川支流の有馬川流域だと勝坂式期終末から称名寺式期の集落（称名寺式期は2軒）の横浜市港北区山田大塚遺跡（16）、鶴見川流域だと称名寺式期最終末から堀之内1式期初頭の横浜市都筑区川和向原遺跡（26）、恩田川流域だと、加曽利E式期から堀之内式期が主な集落（称名寺式期は3軒）が形成された横浜市青葉区稻ヶ原遺跡（43）、恩田川支流の奈良川流域に加曽利E式期から称名寺式期（称名寺式期は1軒）の横浜市青葉区松風台遺跡（53）、鶴見川支流の大熊川流域には中期の大規模な環状集落で知られる横浜市都筑区三の丸遺跡（称名寺式期は9



第7図 縄文時代後期初頭における主要遺跡の分布

軒) (30)、鶴見川支流の鳥山川流域には中期中葉から後期前半の住居址が95軒検出され、後期の狭い範囲での貝層が伴う横浜市港北区篠原大原遺跡 (12) があげられる。

次に相模川、境川流域に広がる相模野台地についてみてみる。

境川流域には中津式土器の要素が強く残る土器が出土し、称名寺式土器の成立過程を考える手がかりとなる大和市下鶴間長堀遺跡 (150)、境川支流の滝ノ川流域には称名寺式期から堀之内式期の住居址1軒が検出されている鎌倉市関谷島ノ神西遺跡 (87) が、相模川流域では支流の目久尻川流域で加曾利E式期から称名寺式期と考えられる住居址が2軒検出されている藤沢市用田鳥居前遺跡 (98)、相模川支流の鳩川流域には称名寺式期の住居址が1軒検出されている相模原市下溝上谷開戸遺跡 (121)、また、同流域には称名寺式期から堀之内式期の住居址が9軒（うち称名寺式期のものは1軒）検出された相模原市下溝鳩川遺跡 (122)、相模川支流の八瀬川流域には阿玉台式期から称名寺式期（称名寺式期は2軒）にかけての住居址が検出された相模原市当麻遺跡 (124)、相模川支流の恩曾川流域には勝坂式期の71軒から構成される環状集落と加曾利E式期の集落（称名寺式期は1軒）が検出されている厚木市恩名沖原遺跡 (143)、相模川支流の荻野川流域には3軒の称名寺式期の敷石住居、方形石組遺構が検出されている座間市山ノ上遺跡 (174) が存在する。

以上みてきたとおり、概して言えることは、中期の大規模集落に比べ、小規模な集落でかつ、同じ時期には1から3軒という規模の集落であったことが想定される（三の丸遺跡については例外といえるかも知れない）。また、県東部の遺跡のなかでは称名寺式期のみ生活が営まれた遺跡は少なく、称名寺式期の前段階である加曾利E式期から称名寺式期、もしくは称名寺式期からその後段階である堀之内式期まで小規模ながら集落が続いていると考えられる例が多くみられた。（下鶴間長堀遺跡および山ノ上遺跡は称名寺式期のみの住居址しか検出されていないため例外となる。）

（宗像義輝）

相模川を境とする県西部も、中期後葉段階における遺跡分布の様相と類似した傾向を示している。県西北部では、相模川水系中津川周辺域の河成段丘上に所在する清川村宮ヶ瀬遺跡群 (191～201) が当該地域の中核地となりうる分布を示しており、相模川水系道志川周辺域の河成段丘上では、山梨県との境をなす相模原市津久井町青根地区に遺跡分布が散見されており、中期後葉段階の遺跡分布状況から比べて西方地域への若干の広がりをみせている。県西南部では、相模川以西の県央部にあたる伊勢原市・平塚市・秦野市を中心とする地域に遺跡分布の集中がみられる。当該地域は金目川水系周辺域である伊勢原台地・北金目台地・大磯丘陵に所属しており、中期後葉段階から引き続き遺跡分布の隆盛がみられる。遺跡分布は大磯丘陵西部、秦野盆地に至る範囲まで散見されており、中期後葉段階から比べて、南西に広がりをみせていることが窺える。県西部を概観してみると、中期後葉段階から比べ分布状況が若干の展開を示すに止まり、急激な遺跡数の増減・展開等はみせておらず、漸移的な変遷として理解される。

次に、前段の県東部で述べた称名寺式期を中心とする住居址の検出遺跡について、県西部の状況を述べる。加曾利E式期から称名寺式期に帰属する住居址が検出された遺跡は、平塚市原口遺跡 (82) 1軒、小田原市久野諏訪ノ原清掃工場建設予定地遺跡 (102) 1軒、足柄上郡山北町尾崎遺跡 (175) 1軒である。称名寺式期に帰属する住居址が検出された遺跡は、原口遺跡 (82) 2軒、小田原市久野一本松遺跡 (100) 1軒、足柄上郡中井町東向遺跡 (No.33) (183) 2軒、清川村宮ヶ瀬遺跡群久保ノ坂 (No.4) 遺跡 (198) 2軒、相模原市津久井町青山開戸遺跡 (209) 1軒である。称名寺式期から堀之内式期に該当する遺跡は、南足柄市塙田遺跡 (175) 3軒である。

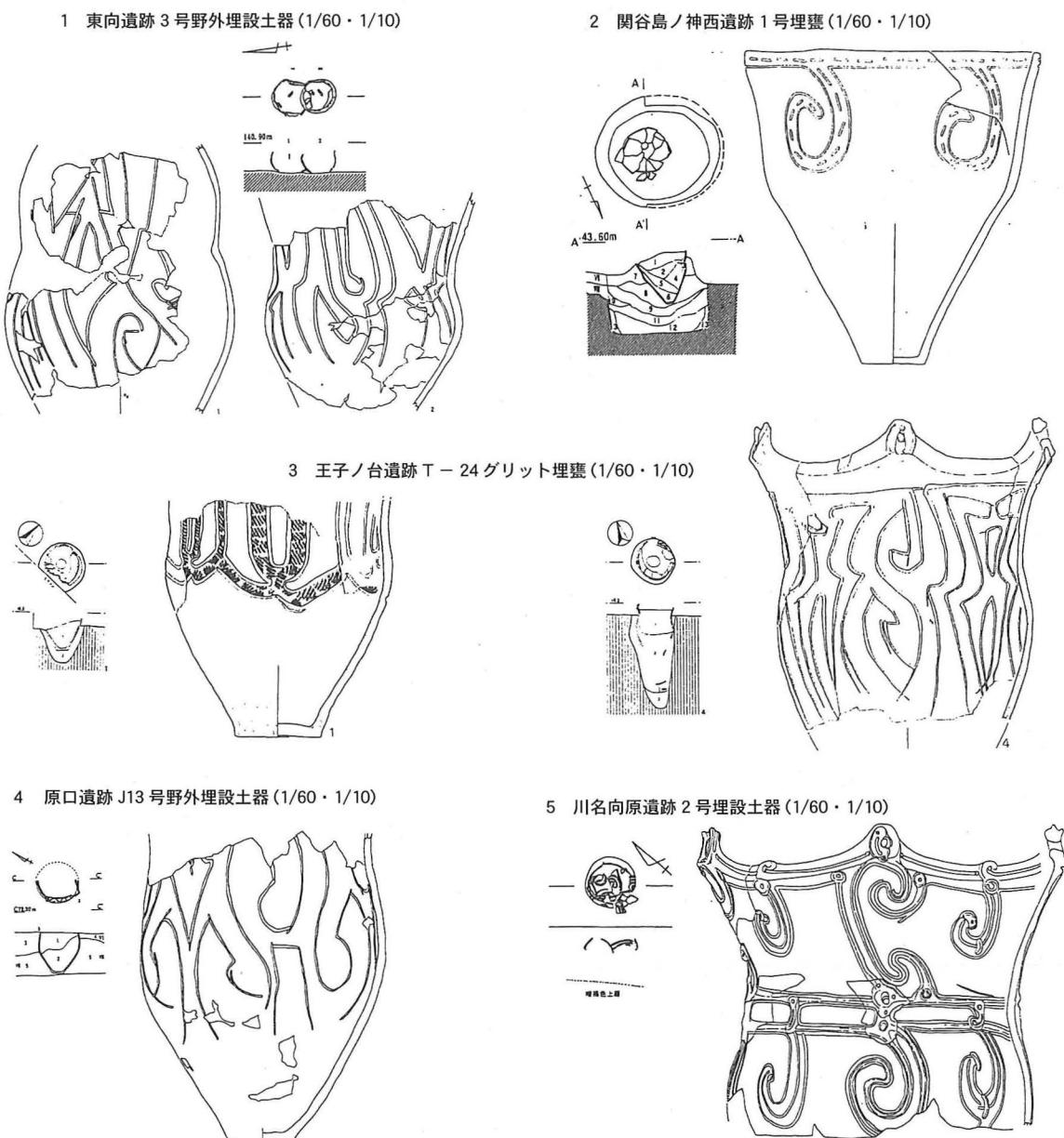
県西部は県東部に比べ、遺跡の分布状況が疎密を呈する様相であり、丹沢山地から派生した丘陵・山地部

には広大な遺跡分布の空白地帯が広がっている。遺跡分布数に対する住居址の検出数も少数であり、このような状況から集落像を捉えることは困難を極めるが、少なくとも県東部同様、集落の小規模化といった傾向は、検出される住居址数等からも推測される。遺跡分布の展開状況は、中期後葉段階から比べて宮ヶ瀬遺跡群や青根地区、秦野盆地の事例のように、西方に遺跡の分布が展開する傾向が窺える。県西部の大部分を占めるのは丹沢山地であり、地形的な制約の大きい地域ではあるが、秦野盆地における遺跡分布数の増加や久野丘陵に所在する遺跡における住居址の検出例、酒匂川水系河内川周辺域での丹沢山地における尾崎遺跡等の遺跡の存在は、西部疎密分布地域における未周知の遺跡が存在する可能性を想定させる。

(近藤匡樹)

VII. 屋外埋設土器 (第8図)

該期の屋外埋設土器は6遺跡で8基が発見されている。中井町東向遺跡3号屋外埋設土器(2個体)、鎌倉市関谷島ノ神西遺跡第1号埋甕、平塚市王子ノ台遺跡T-24グリッド埋甕2基、平塚市原口遺跡J12号、

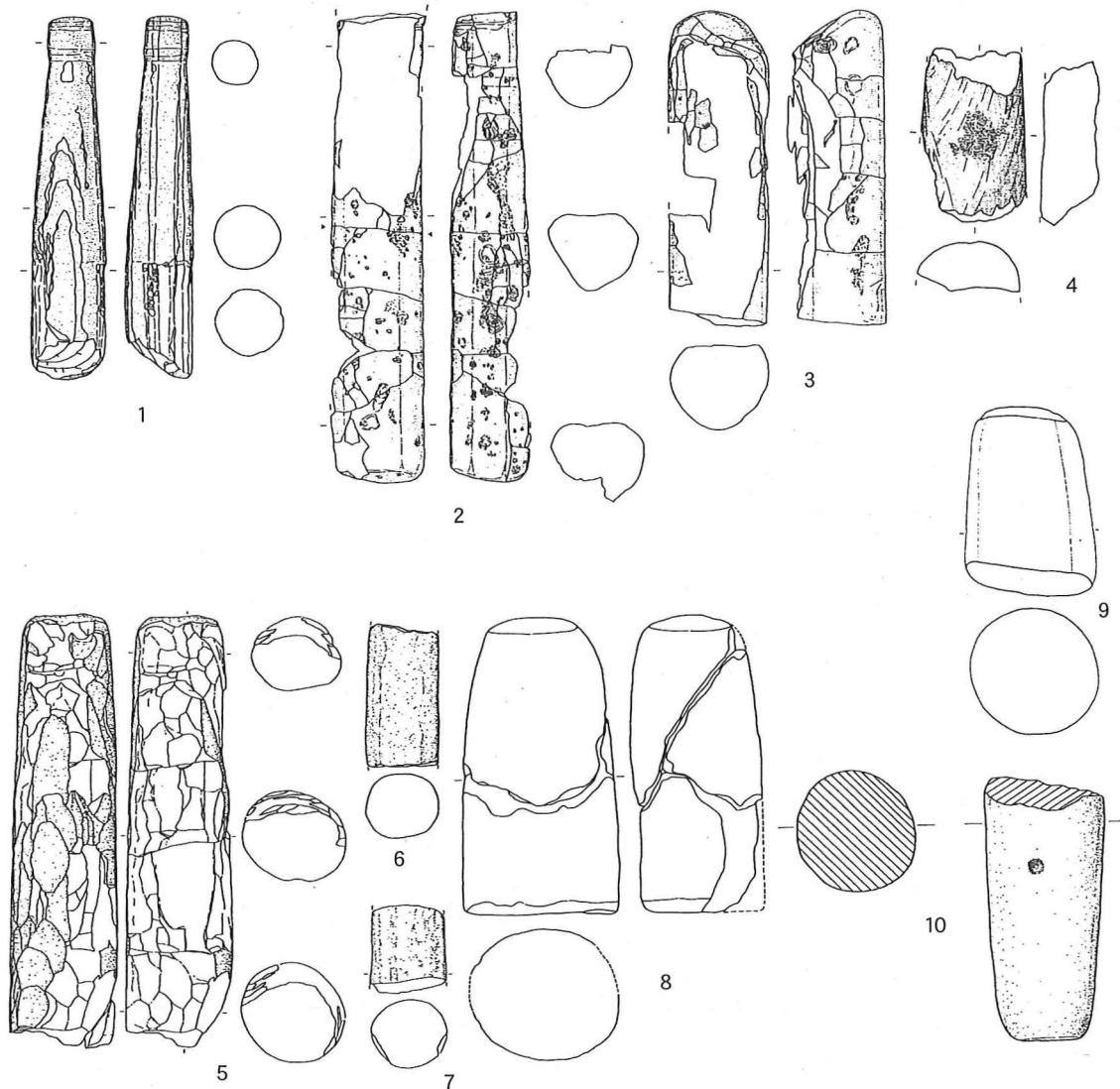


第8図 称名寺式期の屋外埋設土器

13号埋設土器、横浜市都筑区華蔵台南遺跡1号埋設土器、横浜市都筑区川名向原遺跡2号埋設土器である。王子ノ台遺跡にて発見された古段階の1基を除き全て新段階に帰属する。東向遺跡では2個体の土器が一緒に埋設されているものの、他は全て1基につき1個体の土器が埋設される。遺存部位では、関谷島ノ神西遺跡第1号埋甕がほぼ完形、口縁～胴部を埋設するものとして王子ノ台遺跡新段階の埋設土器、華蔵台南遺跡1号埋設土器、川名向原遺跡2号単独埋設土器、胴下半～底部を埋設するものが、王子ノ台遺跡古段階の埋設土器、原口遺跡J13号埋設土器、胴部中位を埋設するものとして東向遺跡3号屋外埋設土器2個体、原口遺跡J12号埋設土器がある。関谷島ノ神西遺跡第1号埋甕、王子ノ台遺跡の2基は土器が収まる程度の掘り込みをもつが、他は明瞭な掘り込みを伴わないもしくは掘り込みが不明である。東向遺跡を除き土器は正位に埋設される。

(阿部友寿)

V. 石器・石製品（第9図）



1.用田鳥居前遺跡J2号竪穴住居址 2.～4.用田鳥居前遺跡J1号竪穴住居址 5.～7.原口遺跡 8.井田中原遺跡B地点
9.東向遺跡 10.川島町西原遺跡

第9図 石器・石製品

ここでは称名寺式器の石器・石製品について概観する。今回対象とした時期において、石器・石製品の多くはその属性に乏しく、土器編年案の各段階設定に符合させることは困難であった。そのため主に遺構からの出土石器・石製品について着目した。遺構に伴う石器は、23遺跡から約200点に満たない状況であり、数量的な傾向は未だ把握しにくい状況にある。さらにその多くは欠損品であるため、器種分類及び形態的傾向の把握は困難であった。数量的には磨石が総数70点を超える数が認められ圧倒しているが、その他の器種については、石鎌・石錐・剥片・打製石斧・磨製石斧・礫器・石皿などが少量出土しているのみであり、その様相は現在のところ明瞭ではなく、調査事例の増加を期待したい。

石製品は、石錐が全遺跡のなかで6点ほど認められ、中井町東向遺跡3号住居址からは3点が出土している。径8cm前後の扁平な礫両端部に打ち欠きの切り目が施されるものである。河川や湖沼などでの漁労活動を示していると思われるが、他遺跡での事例が僅少なため、海浜部との比較など遺跡分布を言及するにはいたらない。

石棒は、横浜市保土ヶ谷区川島町西原遺跡・川崎市井田中原遺跡B地点・藤沢市用田鳥居前遺跡・平塚市原口遺跡から合計10点が出土している。原口遺跡ではJ4号竪穴住居址から3点が認められ、用田鳥居前遺跡ではJ1号竪穴住居址から3点、J2号竪穴住居址から1点の出土があり、当該期の石棒出土事例として注目できるものである。用田鳥居前遺跡J1号竪穴住居址は、石棒が炉石に転用され、分割加工されている。J2号竪穴住居址では、北壁に横倒した状態で出土している。両遺跡とも石棒は被熱を受けていること、石皿や多穴石などを伴う事など共通している要素も見受けられるが、具体的な様相の把握を検討するには事例の増加を待ちたい。

(天野賢一)

神奈川県内 後期初頭土器出土主要遺跡地名表（補遺）

- (1)この表は、「神奈川県における縄文文化の変遷VII-後期初頭 称名寺式土器の様相その1-」(2006『研究紀要』11)に掲載した主要遺跡地名表(文献目録)作成以後に刊行された報告書を中心に、神奈川県内における後期初頭の主要遺跡を抽出してまとめたものである。
- (2)掲載遺跡の抽出基準および表の様式は『研究紀要』11を踏襲している。
- (3)文献の集成、データベースの作成、表の編集は井辺・岡が担当した。

遺跡No.	遺跡名	所在地	文献No.
横浜市保土ヶ谷区			
217	明神台遺跡	明神台 109-1 他	218
平塚市			
218	万田貝殻坂貝塚 (万田遺跡第9地点)	万田 493	220
茅ヶ崎市			
219	大久保D遺跡	芹沢 2757 他	219

遺跡No.	遺跡名	所在地	文献No.
相模原市			
220	古清水遺跡	大島字古清水 2434-1 他	221
伊勢原市			
221	池畠・金山遺跡	伊勢原	222
海老名市			
222	中原遺跡	上今泉 5-27 他	217

文献一覧 (表中文献 No. と一致)

- 217 阿部友寿他 2005 「中原遺跡-国道246号線バイパス建設に伴う調査-」『神奈川県埋蔵文化財調査報告』48 神奈川県教育委員会
- 218 近野正幸他 2006 『明神台遺跡・明神台北遺跡-明神台団地建設に伴う発掘調査-』かながわ考古学財団調査報告192
財団法人かながわ考古学財団
- 219 大塚健一他 2006 『大久保C遺跡 大久保D遺跡-県立茅ヶ崎里山公園整備工事に伴う発掘調査-』かながわ考古学財団調査報告195
財団法人かながわ考古学財団
- 220 中村哲也他 2007 『神奈川県平塚市 万田貝殻坂貝塚(万田遺跡第9地点)発掘調査報告書』平塚市・玉川文化財研究所
- 221 水澤丈志他 2007 『神奈川県相模原市 古清水遺跡 第1次発掘調査報告書』株式会社アーネストワン・加藤建設株式会社
- 222 岩崎 祥他 2007 『神奈川県伊勢原市 池畠・金山遺跡-集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-』
株式会社バラモド・埋蔵文化財発掘調査支援組合